ラーメンズのススメ

１９９６年結成のラーメンズは多摩美で一緒だった小林賢太郎と片桐仁の１９７３年生まれのコンビ。脚本演出は賢太郎が担当し、片桐仁は演者に徹している。テレビで彼らを見る機会はアップルコンピューターのＣＭしかないが、このところ新作はない。ラーメンズという変な名前の由来は諸説あるが、本当のところはただのラーメン好きってことか？
ラーメンズがただのお笑いと一線を画す大きな点として挙げられるのは

- お芝居仕立て
- ボケとツッコミがない
- 哲学的だったり、シュールだったりするコント
- あとで使いたくなるような印象的な言葉や
  ネイノーさん、ノス、ギリジンなどのキャラをたてる
- 片方だけが喋るコントがある
- ダブルミーニングや変化させていく言葉遊びがうまい
- パントマイムを多様、手品もプロ並み

手品師・賢太郎

などだが、ここに切なさや勿論笑いが含まれていてなおかつ、間の取り方、アドリブのタイミングが絶妙。笑いを字で説明するなんて邪道なので（っていうか語彙少なくて無理だし）私情と気合の入ったＤＶＤ紹介だと思ってください。

第9回公演
『鯨』2001年8月初演

ことわざ仙人　超能力　バースデー　壷バカ　絵かき歌　count　アカミー賞
器用で不器用な男と不器用で器用な男の話

☆絵かき歌
ちょっとずるいクジローちゃんと、絵かき歌が好きな純真な男。
実は、一年間だけ人間の姿をした鯨だった。
☆器用で不器用な男と不器用で器用な男の話
成功した後輩と人生がうまくいかない先輩の組み合わせ。言いたい放題の先輩を盲目的に尊敬している後輩。この関係は『蒲田の行進曲』にも見られる。

特別公演
「零の箱式」2001年8月初演

現代片桐論　文庫本　タカシと父さん　釣りの朝　かわいそうなピンクの子犬コロチンの物語　片桐教習所　日本語学校フランス編　小さな会社

☆釣りの朝

朝早くに起きて鼻歌交じりにお弁当作って楽しみにしていた釣りをドタキャンされた片桐仁。釣りに一緒に行きたくない賢太郎がなんとか片桐仁も行かなくなるようにでたらめな理由で説得しようとする。最後に賢太郎がベッドから「**来いよ**」で締め。

第10回公演

『雀』2001年12月初演

お時間様　音遊　プレオープン　許してください　人類創生
ネイノーさん　男女の気持ち　雀

☆ネイノーさん

語尾にネイノーをつけて話し、突然色々な人物（勝新太郎や立川談志たち）が憑依してしまうネイノーさん。ネイノーさんのキャラがたまらなくおかしいのにプラスして、片桐仁が台詞を間違えて「**あ、おまえ**」って嬉しそうに賢太郎がつっこむところもおかしい。ばっかじゃネイノー。

第11回公演

『CHERRY BLOSSOM FRONT345』2002年3月初演

本人不在　エアメールの嘘　レストランそれぞれ　怪傑ギリジン　小説家らしき存在
マーチンとプーチン２　蒲田の行進曲

☆エアメールの嘘

海外で化石探しをしている友人から来たエアメールを、片桐仁が自慢げに読み聞かせるが、まるで興味を示さない賢太郎に「**きょーめよ**」っていう片桐仁のアドリブに本気で笑ってしまう賢太郎が可愛い。化石探しの友人は最後のコントの『蒲田の行進曲』の近藤さんだということがあとでわかる。

☆レストランそれぞれ

基本はレストランで話をしている二人。その話の流れを止めないまま、賢太郎はウェイターになったり片桐仁は他のテーブルの客になったりと、なんの不自然さもなく３人ずつを演じ分けている。この演じ分けは、もっとシンプルかつ都会的になり＜ＴＥＸＴ＞の『あいうえお作文（仮)』で見られる。

☆怪傑ギリジン

♪ｷﾞﾘｷﾞﾘｷﾞﾘｷﾞﾘｼﾞﾝｼﾞﾝ…と歌いながら竹馬に乗って登場する等身大ヒーロー、ギリジン。片桐仁だけが話し、賢太郎は何も喋らない。唯一、逆のパターンは『バニー部』。
賢太郎が一切言葉を発しないギリジンシリーズでは片桐仁が賢太郎を笑わせようとする様がおかしい。

↑プーチン＆マーチンと　↑勘違い上等女

☆マーチンとプーチン２

黒と白のマペット２体を使ってロシア民謡「カチューシャ」（♪りーんごーの花ほころーびー）の替え歌で切ない人間を歌いあげるプーマーの第二弾。勘違い上等女の妖しさやゴディバ男爵を水鉄砲でやっつける無邪気さが売り。

☆蒲田の行進曲

海外に飛び立つ前の近藤さんは後輩の大島の会社でバイトをしている。二人は花見の場所取りを豚と神様ゲームなどをして過ごすが、やがて「銀ちゃん」と「ヤス」の世界になっていく。『器用で不器用な～』の関係と同じでつっぱってる先輩に対して、愛情をストレートに伝える後輩。理不尽な関係に見えるが、これは立派な友情物語。

第12回公演

『ATOM』2002年12月初演

上下関係　新噺　アトム　路上のギリジン　採集　アトムより

☆アトム

長い年月をカプセルの中で眠ってすごした父親が目覚めたとき、小さかった息子と同じ年になっていた。２１世紀は思っていたような未来じゃないとわかった父親はまたカプセルに入ろうとする。アトムという名前の息子は泣きながら父親を殴る。「10万馬力じゃなくてよかっただろ」。想像していた２１世紀との落差は誰もが思うこと。飛び出せよ、テレビィ！

☆路上のギリジン

ストリートミュージシャンのギリジン。乗ってきた竹馬のギザギザのところをギター代わりにテーマソングを歌う。ステージの端にはステージに背を向けた賢太郎がいる。

☆アトムより

純粋なノスとノスが大好きなトガシくん。語尾にノスをつけて話す変な話し方や『アトム』のカメラテストなどの遊びで笑わせてくれる。窓の外に飛んでいるものを見つけて賢太郎が「…あぁ、アトムだぁ…」という印象的な台詞で未来の話だとわかる。そして最後には愛すべきノスの実体がわかって、天気がよく気持ちのいい日の優しい二人の関係が一気に切ないものとなる。愛すべきノス。優しいトガシくん。大好き。ラーメンズのコントはそれぞれタイプが違うので順位をつけにくいけど、これは間違いなく私のベスト３に入る作品。

第13回公演

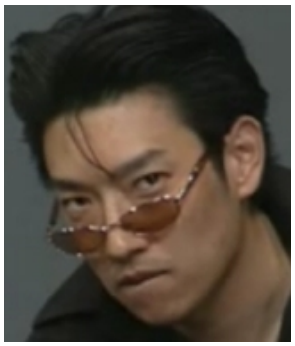
『CLASSIC』2003年3月初演

ベルボーイの旅館化計画　マリコマリオ　受験

ダメ人間　ギリジンツーリスト　バニーボーイ

１３１３　帝王閣ホテル応援歌

↓ダメ人間



☆バニーボーイ

この公演はクラシックホテル内の出来事で統一されている。最初と最後はベルボーイがホテルを改善しようとする話、『マリコマリオ』はカンヅメにされている漫画家コンビ、『受験』は大学受験のためにとホテルで勉強している家庭教師と七浪の受験生、『ダメ人間』はコンシェルジュをしている親戚を頼って来るダメ男、『ギリジンツーリスト』はギリジンシリーズで唯一賢太郎との会話がある。

『１３１３』はロバの幽霊とホテルマンの見本のような宮沢さんとの掛け合い。そしてなんと言っても、『バニーボーイ』。売れないバニーボーイの賢太郎が客の片桐仁が泊まっているホテルに行き、同伴を頼む。そこでなぜ人気がないのかの証明に会話の練習を始めるが、噛み合わない会話の面白さもさることながら、賢太郎の表情がすごい。こんなにイノセントな眼は産まれたばかりの子供にも無理じゃないだろか。

第14回公演

「STUDY」2003年12月初演

ｓｔｕｄｙ　ホコサキ　ＱＡ　科学の子　地球の歩き方

いろいろマン　金部

↑自分の言ったことに満足して不敵な笑いをするホコサキさん

☆ホコサキ

人の部屋に勝手に入って捕まった片桐仁を「要するに彼が何を言いたいのかというと…」と庇うホコサキさんの矛先は違うところにむかっている。

☆金部

大学の金部の部長と副部長が交通量調査のバイトをしながらお金の話をしている。一部屋３万円の部屋に３人で泊まった。割引で千円を返してもらったので３人で３００円ずつ分けた。残りの１００円はフロントマンがポケットに。払った金額は一人９７００円。×３で２９１００円。まけてもらった９００円を足して３万。…あれ？フロントマンがポケットに入れた１００円は？といった数字遊びをする。

第15回公演
『ALICE』2005年1月初演

モーフィンク　後藤を待ちながら
風と桶に関する幾つかの考察
バニー部　甲殻類のワルツ　イモムシ
不思議の国のニホン

☆モーフィンク
コント、笑いというよりラーメンズ特有の言葉遊び。言葉がどんどん変わっていく。

☆イモムシ
イモムシと人間がペアで戦う体操競技。レイコという名前のイモムシを賢太郎が操ると可愛い女の子に見えてくる不思議。賢太郎、お化粧してるし♪

☆不思議の国のニホン
ただ笑ってみてればいい「日本語学校」シリーズ。どこかの国で先生が生徒にニホンの都道府県を特徴をあげて教えている。一番のお気に入りは岐阜と熊本。ちなみに広島県は　主食お好み焼き、おかず生牡蠣、おやつ紅葉饅頭　と紹介されています。

第16回公演「TEXT」2007年2月初演

初めてラーメンズに触れたのはＭａｃのＣＭ。それから Cacco が貸してくれた賢太郎の一人舞台＜ＰＯＴＳＵＮＥＮ＞。すごい人だなぁと思ってるときに衛星放送で＜ＴＥＸＴ＞を見て、堕ちた。

まだ＜ＴＥＸＴ＞はコントの題名が発表されていない。＜ＴＥＸＴ＞公演からすると『あいうえお』は国語、『透明人間』は数学、『ジョッキー』は体育、『銀河鉄道』は道徳があてはまりそうだが、全体に流れている言葉遊びを指して＜ＴＥＸＴ＞なのかもしれない。いずれにしてもどんな題名になるか楽しみ。なので、題名は予測です。

☆あいうえお作文
新しい５０音表を作るために色々なパターンをバイトと社員が考える。他に部長、社長、｀会社の鬼と書いて社鬼´の５人をテンポよく演じ分ける。ちょっと無駄な繰り返しが目立つけど、大好きな作品。シャキーン！

☆ダブルミーニング
刑事ともてない男、開店請負人とテレビ的冒険家など二人の組み合わせで４つあるが、なんといっても最後の「料理を作る人と携帯で話す人」が秀逸。初めて見たときは言葉遊びのうまさに感動した。

☆透明人間

透明人間がいるという片桐仁を賢太郎が論破していく。片桐仁の人のよさと賢太郎の頭のよさが会話の中によく現れている。私も賢太郎に簡単に論破されてしまう自信あり。ジシンといえば、最初のテレビ放送のときに片桐仁のアドリブ「お前、ばかだもんなー」に本気で笑って賢太郎がこづく大好きなシーンで震度３の地震速報が繰り返し流れて辛かった。。

☆条例が出た

恭しく話さなければいけないうやうや条例、ハリウッド、ミュージカル、短歌条例など５つの条例を同じ話で演じる。ミュージカル条例で突然現れる手には驚かされた。ラーメンズの舞台は、賢太郎だと思っていたら片桐仁だったとかの驚きがあるのも特徴。

☆ジョッキー馬坂仁

ジョッキーの片桐仁が一人で喋り、馬のかぶりものをかぶった賢太郎は一言も発しない。会場がだれる雰囲気を片桐仁が解かってて格闘する姿はいじらしい。

最後に「全部シナリオじゃい」って言うんだけど、これは違うと思うんだけどなぁ。。

☆銀河鉄道

【銀河鉄道の夜】をベースにした叙情的な作品。トキワくんとカネムラくんの名前をジョバンニとカムパネルラから取っていたり「塗れた上着」「配達を忘れた牛乳屋」「３時に着く切符」などなど、各所に鏤められたキイワードがわからなくて長ったらしく感じたのは宮澤賢治を読んでいないあたしの問題ね。。「ずっと一緒にいような」という切ない片桐仁の台詞は「ずっと誰かといたような気がする…」と答えた賢太郎で報われた気がする。

その余韻を残して終わるのかと思ったら、コント屋賢太郎の一言があって終えた。

ラーメンズのコントは突然始まる。長いドラマの真ん中をぽんと切り取ったような感じ。二人の会話で段々と状況や人間関係が解かってくる。笑えるだけじゃないコントに切なくなったり感嘆したり、感情は揺さぶられる。シュールな設定も練りに練られた脚本とそれをこなす役者がいるから自然に受け入れることが出来る。その辺が演劇に近いと言われるところか。（けしてコントより演劇が上なんてこたぁ思っちゃいませんが）

浜省はｙｕｋｏさん、由佳ちゃんというお友達を連れてきてくれて外の世界が広がり、ラーメンズはイマジネーションを与えてくれて自分の世界が広がった（それって益々引きこもるってこと？^_^;)。よくＣさんが「あの子（Ｓクン）を嫌いな人がいるなんて信じられなぁい、みぃんなあの子を好きなんでしょぉ」と恐ろしい誤解をはくが、ラーメンズのコントの理屈っぽさ、シュールさ、繰り返しの多さ、そんなのが苦手な人がいることを私はちゃんと知っている。でも、おとすところがわかっているのに、何度見ても笑えるコントの存在は知ってほしい。そして一緒にラーメンズ会話したいノス！

最後にラーメンズの秘密を。何年も前から変わらない片桐仁、同じ舞台で役によって顔がころころ変わる賢太郎。実はラーメンズは何人もいるらしいですょ。